

農業 福祉 つなぐ「夢」



色づいたトマトを収穫する水尻宏明さん(左)、長男の誠人さん、妻の敦子さん=余市町

余市のNPO「どりーむ・わーくす」

農業と障害者福祉が結びつく「農福連携」に、余市町のNPO法人「どりーむ・わーくす」が取り組んでいる。調理用トマトを栽培する農園での作業に加え、今月には、障害者が通りで働く場も町内に開設した。地元の農業活性化にもつなげたいという。

障害者の自立目指し トマト農園や事業所

「どりーむ・わーくす」は、理事長の水尻宏明さん(55)が「農福連携」を掲げて昨年11月に仲間と共に立ち上げた。今月16日には、余市町にある同法人の福祉農園で、トマトの収穫体験会があり、障害者やボランティアら28人が赤く熟したトマトを手摘みで820キロを収穫した。

水尻さんは2005年、21年間勤めた会社を早期退社。12年に父親から余市町の田畠を引き継ぎ、4代目のぶどう農家になった。退社直前まで情報誌「北海道じゅらん」の副編集長をしていたが、知的障害のある自閉症の長男誠人さん(25)の将来を考えた決断だった。

就農から4年目の14年、

本業のぶどう農園のほかに調理用トマトの本格栽培に取り組んだ。栽培が簡単なうえ、手作業を必要としないかつ様々な加工に向く、「農福連携」に適した農産物として注目した。

昨年は大手食品メーカー「カゴメ」が独自開発したジュース用トマト苗を20万株契約栽培し、5・5トントを収穫された。今年は40万株で20万株の調理用トマトの収穫を見込んでいる。ジュースは11月末ごろ、ネット通販で定販売される。農園では今春から、障害者と家族ら延べ2000人以上が、植栽や収穫作業に携わってきた。

こうした取り組みによって、水尻さんは今月、余市町黒川町の実家を、障害者が通いで働いて工賃を得る「就労継続支援B型事業所」として開設した。障害者の自立支援だけでなく、将来の労働力不足や遊休耕作地への対策で、障害者の労働力をいかし、地元農業の活性化にもつなげたいとしている。(佐久間泰雄)